

学校長式辞

比良の山々の残雪を照らす朝日にも、春の訪れを感じられるようになった今日のよき日。本日ご多用の中ご臨席を賜りましたご来賓の皆様をはじめ多くの保護者の皆様に卒業生を祝福していただきますことを、高段からではございますが厚く御礼申し上げます。

さて、卒業生のみなさん卒業おめでとう。

さきほど、みなさんと一緒に歌った最後の校歌、大変、感慨深いものとなりました。今日私は、この校歌の歌詞に込められた思いをたどりながら「命と心のリレー」を大切に「夢と希望」をもって巣立って欲しい願いを伝えたいと思います。

真野小学校の校歌の2番には、「真野の入り江の歴史は遠く、めぐみつきない祖先（そせん）の土にわれら若草、光をあびて」の歌詞があります。古くからの真野の歴史の中で多くの方が耕し、培ってこられた土にみなさんのような若い芽、若い草花が光を浴びて、すくすくと成長していく姿を感じます。そして、そこに、私は古くの時代から受け継がれてきた「命のリレー」というものを感じます。しかし、この命のリレーが大きな犠牲とともに途絶えることもあります。

3年前、日本は、死者行方不明者1万8000名を超える未曾有の東日本大災害に襲われました。福島県の南相馬市の同じ名前の真野小学校も大きな被害を受けた学校の一つでした。みなさんは、はげましのメッセージをこいのぼりに託し届けました。思いやりのリレーのバトンは、被害を受けた土地に桜の花が咲くのと同じように、傷ついた悲しい心を温かく勇気づけてくれました。

しかし、先日学校の方に南相馬の真野小学校が廃校となり、学校の閉校式の様子が伝えられてきました。私たちの真野小学校は平成27年に創立140周年を迎えますが、南相馬の真野小学校はそれよりも古く、今年141年の歴史を持つ学校でしたが、となりの鹿島小学校という小学校に統合され学校の歴史に幕宇を閉じます。校舎ががれきでほとんど使えなくなり、市外へ避難される方も多く児童数が減少したため来年の新入生はなくなつたからです。

学校がなくなる、ふるさとの土地と離れる、その悲しい思いは想像に耐えませんが、南相馬の児童の代表が閉校式で「真野小とお別れするのが悲しいですが、ふるさとを大切にする心、感謝の気持ちは持ち続けたい」と述べているように母校やふるさとを大事に思う

気持ち、私たち真野小学校のみなさんが送った激励のメッセージへの感謝の気持ちも、学校はなくなってもきっと次の世代にバトンタッチされていくことでしょう。なくなっても引き継がれていくもの、みえなくても届くもの、そのような命や心のリレー、思いやりのバトンパスがあると思います。みなさんも真野の歴史をしっかりと引き継ぎ、また、新しい光を探りながら自分を成長させて欲しいと思います。

校歌の3番には「町は開ける、時代は進むもえる希望に心はおどる明日は花咲くつぼみのわれら」、この歌詞のとおり時代はどんどん進んでいきます。また、時代をつくっていくのもみなさんです。真野で活躍する人もいれば、真野を離れて活躍する人もいます。しかし、どこにいたとしても真野小はみなさんの心のふるさとです。夢と希望をもって明日に向かって行って欲しいと思います。まさに「心のおどる明日」であって欲しいと思うのです。

真野小学校の校歌には地域や保護者の方の強い願いや励ましが歌い込まれています。辛い時や悲しい時にそっと校歌をくちずさんでください。きっと明るい光が差し始めると思います。

そして、力強く成長したみなさんが次の真野を支える人材となって、さらに住みよい社会、平和な世界を築いてくれることを切に期待します。

保護者の皆様にはお子様のご卒業、誠におめでとうございます。6年間本校教育にいただきましたご理解とご協力に対しまして心からお礼申し上げます。お子様の健やかなご成長と今後の輝かしいご活躍を教職員一同心より期待しております。

終わりにになりましたがご来賓の皆様には、本日このように成長した六年生を送り出すことができたのも皆様方のお力添えがあつてのことだと強く感じております。今後とも、今までと変わりなく、見守り、育てていただきますようお願い申し上げます、式辞とします。

平成26年3月19日

大津市立真野小学校 校長 松井 浩